

日本哲学会林基金若手研究助成報告論文
ベルクソン『物質と記憶』の現代的検討に関する一考察
—チャーマーズの「自然主義的二元論」との接続

居永正宏*

はじめに

本報告論文は、ベルクソンが『物質と記憶』(以下『物質』)で提示した二元論的構造を現代において改めて検討する際の一つの方向性を示すものである。

第1節 先行研究—『物質と記憶』の不在

この目的に関わる先行研究は、A)脳神経科学、B)哲学的な心身問題論、C)ベルクソン研究、の三つの領域に分けることができる。それぞれの領域について、簡単にではあるが見ていきたい。

A. 脳神経科学

この領域に関する先行研究は、さらに二つに分けることができる。一つは、当時の脳神経科学の成果の中でもベルクソンが特に参照した記憶(失語症)の研究について、それ以降から現代に至るまでの研究の進展について、もう一つが、脳神経科学全般でのベルクソンへの言及とその影響についてである¹。

ここでベルクソン以降の記憶研究の進展を辿ることは到底できないが、まず確認しておくべき点は、『物質』で提示された記憶の二分法が「手続的記憶」と「エピソード記憶」という基本的な記憶の分類として現在でも用いられている一方で、「作業記憶」と「長期記憶」の区別や、記憶障害における「前向性健忘」と「逆行性健忘」など、『物質』の時代には知られていなかった記憶の特性が明らかになっている、ということである。その点において、『物質』は記憶の研究に関する先見的な記述を含んではいるものの、その記述が記憶現象のすべてを包含していた、ということではできない。しかし他方で、『物質』における記憶の「痕跡説(記憶は物質としての脳に何らかの形の痕跡として保存されている)」に対する批判は未だ有効であり、「現代の神経生物学が記憶の神経的痕跡の問題について説得力のある解答を提出できていないのは間違いない」(Gallois 1997, 15)²。つまり、多様な記憶現象の分類記述はともかくとして、脳は記憶を保存するのではなく、それ自体で存在す

* 日本学術振興会特別研究員 PD・関西大学

¹ (認知)脳神経科学の展開に関しては Kelly, et al. (2007) の第一章、特に記憶については同書第四章が詳しい。

² また、「失認症に関する現代の機械論的解釈で、それが「記憶痕跡の破壊」に起因するとしているものは一つもない。同じように、失語症と失行症に関する主流の解釈も、一般的にそれらを記憶痕跡の喪失ではなく脳内の組織化された構造の乱れに起因するとしている。…(したがって、ベルクソン以降の記憶研究の蓄積にも関わらず、)ベルクソン流の記憶理解は何ものにも取って代わられてはいないのである」(Barnard 2011, 191) という指摘もある。以下、引用箇所の表記は「出典、頁 [邦訳頁]」、また引用文内の () は引用者による挿入。

る記憶が現実化するための器官であるということ、言い換えれば、「…記憶(の存在)は脳の一つの機能とは別物なのである」(MM 368[339])という『物質』の根本的な主張に対する本質的な反論は、現代の記憶研究においてもなされてはいないと言えるだろう。

広く脳神経科学全般に目を移してみると、ベルクソンへの言及はほとんど皆無と言ってよいと思われる。大勢を占める機能主義的研究は言うに及ばず、例えば、数少ない意識を対象とする研究を行っているコッホ(2006)にも、ベルクソンへの言及は見られない。数少ない例外がフランスの代表的な脳科学者のシャンジューだが³、その言及は詳細な検討と呼べるものではなく、例えば、「(ベルクソンの「記憶が脳とは別に実在する」という)今日では擁護しがたいこれらの命題は当然にも唯物論的一元論にその座を明け渡している」(シャンジュー 1991, 67-68)というような、唯物論的立場からの断定である。

このように、総じて言えば『物質』と現代の脳神経科学との直接的な接点は無きに等しく、他方後者によって『物質』の諸命題が反駁されているとも言えない、というのが現状である。

B. 哲学的な心身問題論

ベルクソン以降、心身(心脳)問題は特に英米系の哲学において盛んに論じられてきた。しかし、ベルクソン哲学が前世紀初頭の流行の後、急速に歴史の中に忘れられていったことを裏書きするかのよう、英米系の哲学が心身問題を論じる際にベルクソンに言及することはほとんどない。これは、『物質』が特に心身問題を中心に据えた代表的な哲学書の一つであることを考えれば、極めて奇妙な事態である。『物質』の中でベルクソンが批判した、唯物論、古典的二元論、随伴現象論は、現在でも繰り返し批判の対象として引かれ続けているが、それに対するオルタナティブを提示するに当たってベルクソンの議論が参照されることは——次項の「ベルクソン研究者」の文献を除けば——ほとんどない⁴。このような状況について、米国の宗教学者 William Barnard が次のように述べている。

21世紀初頭において、ほとんどの西洋の哲学者と心理学者は、『物質と記憶』がまるで著されたことがなかったかのように振舞っている。…(多くの学者が心身問題について盛んに論じている)この哲学的・心理学的な思索の奔流の中で、ベルクソンの著作への言及が聞かれることはまずない。(Barnard 2011, 105)⁵

これが一体何に起因しているのかは定かではない。ただ、少なくとも現代の心身問題に関する諸文献と『物質』を丁寧に読み比べて見れば、後者が前者に与える示唆は少な

³ 優れた「脳科学」批判を著している山本・吉川(2004)が、シャンジュー(1989)について、「批判的にであれベルクソンの『物質と記憶』に言及した現代の脳科学書を他に見たことがない」と述べており、筆者も同様である。この点に関しては、Tzavaras(1987)も参照。

⁴ 筆者の知り得た範囲での数少ない例外は、生物学者による Sheldrake(2012)と心理学者による Kelly, et al.(2007)である。ただ、前者の主張する“morphic resonance”という議論の余地のある概念や、後者の強い「神秘主義」志向などの点で、それらが哲学的に支持しうるかは定かではない。特に後者は「死後の生」への強い関心の点でベルクソン哲学との関連が興味深い(居永 2012)が、ここでは参照に留めたい。

⁵ 英米系の心身問題の系譜とそこでのベルクソン哲学への参照の欠如については、同書第13章および Mullarkey(1999a)の第2章が参考になる。

いことは間違いない。

C. ベルクソン研究

上述の二領域はともかく、ベルクソン研究の側からは、常にその科学哲学的な意義を問い直す試みが続けられてきており⁶、『物質』の対象とする心身問題もその中で論じられてきている。例えば、1987年出版の *Bergson and Modern Thought* というアンソロジーは広く現代科学とベルクソン哲学との連関を論じており、その中に神経心理学の章が設けられている。また、1999年のアンソロジー *The New Bergson* では、“The Mind”と題された章で『物質』の検討が行われている。しかし、前者では『物質』を中心としたベルクソンの主張をまとめた上で、それが現代物理学(相対論、量子論)や脳神経科学の知見と矛盾しない、——「だからベルクソンは先見的であった」——という文脈での議論が多く(Papanicolaou 1987; Čapek 1987; Pribram 1987)、それを越えてベルクソン哲学が示す積極的な理論的可能性がどのように展開するののかについての議論は少ない。後者は、同じようにベルクソンの議論のまとめが多くを占めているが、それを前項に挙げた英米系の心身問題と接続して論じる可能性を示唆している点で新しいと言える(Worms 1999; Matthews 1999)。しかし、それはあくまで示唆に留まっており、具体的な議論が与えられているわけではない。

他に、厳密にはベルクソン研究というよりはそれと脳神経科学研究との間に位置づけるべきかもしれないが、1997年にフランスで行われたシンポジウムの論集 *Bergson et les Neuro-Sciences* が出版されている。先の「現代の神経生物学が記憶の神経的痕跡の問題について説得力のある解答を提出できていないのは間違いない」という引用はこの論集からのものだが、この論集には現代脳神経科学の観点からベルクソンの脳の理解に誤りがあることを指摘する論文も含まれている(Delacour 1997; Missa 1997)。しかし例えば、「脳は運動を運ぶだけではなく、生化学的な作用も組み込んでいる」とか、「脳は直列的・局所的な処理を行うのではなく、並列的・分散的な処理を行うのである」といった批判(Delacour 1997)は、——そもそもそれが『物質』の十分な理解の上になされているのかどうかという点も疑問ではあるが——『物質』の議論の本質に関わるというよりは、あくまで当時の脳神経科学の知見に基づく限りでベルクソンがモデル化した脳の理解に関わるに過ぎず、それが現代的な脳理解によって上書きされたとしても、ベルクソンがそこから引き出した諸々のラディカルな命題の真偽に直接影響するかはまた別の問題である。

このように、心身問題を巡るベルクソンの科学哲学的研究においては、一方にベルクソン哲学は現代の科学的知見と矛盾しないどころか先見的であったという評価があり、他方でベルクソンの脳理解は現代的には誤りではないかという指摘があり、その対立とは別に、『物質』を現代の英米系の心身問題と接続して論じる可能性が示唆されているが、その可能性が実際に展開されているわけではない、という状況である。

ここまで見てきた三つの領域の先行研究の状況を踏まえれば、『物質』の現代的検討という広漠とした試みに一つの手掛かりが見えてくる。それは、行き詰まり状態にも思われる現代の英米系の

⁶ ベルクソン研究全体の流れについては、藤田(2009)、杉山(2006)が参考になる。

心身問題論に『物質』を持ち込み、それらと直接の比較検討を行う、という作業である。もちろん、『物質』の精神に忠実に従うなら、現代の脳神経科学の知見との直接の突き合わせも行うべきところだが、膨大な情報の蓄積がある脳神経科学研究を俯瞰的にレビューすることの困難さに加え、それが一般に前提としている機能主義的な立場は英米系の心身問題論の中に含まれているから、まずは哲学的な水準で議論を始めるのが適当であろう。以下、紙幅は限られているが、この方向での一つの試みとして、英米系の心身問題論を代表する一人であるチャーマーズの「自然主義的二元論」について、『物質』の枠組みから若干のコメントを行いたい。

第2節 ベルクソンとチャーマーズ—現代における二元論の可能性

周知の通り、チャーマーズは意識の「難しい問題」の重要性を主張(Chalmers 1995)して大きな反響を呼んだ哲学者であり、その後、現代の心身問題論の第一人者として活躍している。そして彼は、「昔の私自身も含め、多くの人が、意識にまともに取り組みながら同時に唯物論者であり続けることができると考えてきた。私は…、それは可能でないこと、それも直截簡明な理由でそうであることを論じた。その教訓は、現象を捕まえたければ、ある種の二元論を採用しなければならないということである」(Chalmers 1996, 168 [216])と述べ、唯物論的一元論を明確に否定し、かつ McGinn (2000) のような不可知論にも与せず、現代における二元論の可能性を積極的に探求している数少ない論者の一人である。その点において、同じく唯物論を否定して独自の二元論的な枠組みを構築した『物質』との比較検討に相応しいと考えられる⁷。

チャーマーズは彼の二元論を「自然主義的二元論 (Naturalistic Dualism)」と呼ぶ。それは、デカルト的な「精神／物質」の両者を実体として置くのではなく、あくまで自然世界の枠組みの中に意識経験を位置づけようとする点で「自然主義的」であり、他方で、意識経験は物理特性（時空間、質料—エネルギー、電荷、スピン等々）とは異なる自然世界の根本特性であり、前者を後者に還元することはできないとする点で「二元論」である。これを主張するために展開される種々の議論——「哲学的ゾンビ」の思考実験、論理的付随性と自然的付随性の区別、心身問題における他の立場（消去主義、同一説、随伴現象説、汎心論等々）との関係など——の詳細はここでは措いて、その中心的な主張は、意識経験を物理的根本特性に加わる新たな現象的根本特性（「原—現象特性 protophenomenal properties」とも呼ばれる）として認めた上で、両者の関係を定める根本法則を探求するべきだ、というものである⁸。

チャーマーズは両者の関係の一つの理論的可能性として、情報理論に基づいた「二相原

⁷ ちなみに、彼の著作にはベルクソンへの言及は見られず、わずかに Chalmers (1995) で“élan vital”が素朴な生氣論として数行で否定されているのみである。

⁸ 「(物理学の根本理論が〈万物理論〉と呼ばれる時がある。)しかし、意識が物理特性に付随しないという事実は、この理論がまったくもって万物理論などではないということを示している。意識を根本理論の射程内に収めるには、新たな根本特性と法則を導入する必要がある」 Chalmers 1996, 126 [166]。傍点は原文イタリック。

則 the double-aspect principle」を提示している。それは、「…情報には物理的側面と現象的側面の二つの側面があるという基本原則」(Chalmers 1996, 286 [350])であり、「現象的な状態があるところならどこでも、それはある情報状態を実現しており、そのある情報状態というのは、脳の認知システムにも実現されている。逆に、少なくとも物理的に実現されているある情報空間については、ある情報状態がその空間で物理的に実現されているときには、それは必ず現象的にも実現されている」(Ibid.) というものである⁹。一言で言えば、情報を表現するという点において、物質と意識経験は必ず表裏一体のものとして同時に存在している、ということである。それは、極端に言えばサーモスタットのごく原始的に情報状態を実現しているものにおいても、それに対応してごく原始的な現象状態（即ち意識経験）が実現しているということを含意している¹⁰。

この自然主義的二元論を『物質』と付き合わせてみると、両者の交錯からいくつかの理論的可能性が浮かび上がってくる。ここでは3点だけ挙げておきたい。

1. 意識経験を自然世界の新たな根本特性として認めるべきだというチャーメーズの主張は、『物質』の冒頭で導入される「イマージュ」と重なり合う。そこでは、「物質」と「物質の知覚」は切り離されたものではなく、部分と全体の関係として捉えられていた。それは、物質とは一種の薄められた知覚経験であることを含意しており、チャーメーズが物質に備わると主張する「原一現象特性」と符合する。さらに、ベルクソンはイマージュの全体から現実の知覚が身体の可能的行動として切り取られると述べており [MM 173 [15]]、それを「物質の原一現象特性は情報状態を実現している」というチャーメーズのアイデアを通して解釈すれば、イマージュの全体から身体を通して現実の知覚が生じるメカニズムを、情報状態の変容プロセスとして探求するという、知覚論の新たな方向性が考えられる。

2. 自然主義的二元論は現象的特性と物理的特性を区別するが、その区別が絶対的なものである限り、「現象的特性である私たちの意識がなぜそれとは質的に異なる物理的特性を捉えることができるのか」という二元論の古典的な難点が生じる。チャーメーズはこの点に関して、両者は同一の基体の二つの現われかもしれないという一種の汎心論の可能性に言及している (Ibid., 297-299 [365-367])。ただ、彼はあくまでも「自然主義的二元論」が根本であり汎心論はその一部だとしている。しかし、『物質』における「物質＝イマージュ＝知覚」のアイデアを踏まえ、情報概念を蝶番にして物理的特性と現象的特性を本性的に同質のものとして捉え返すことができれば、意識と物質の切断が霧消すると同時に上記難点も解消されることになるだろう。そのためには、彼が示した汎心論の可能性を、『物質』を通して吟味する作業が必要である¹¹。

⁹ 「情報空間とは、私が以後情報状態と呼ぶ数多くの状態と、そうした状態の差異関係の基本構造からなる抽象的空間である（例えば0と1の二つの状態の差異からなる空間）」 Ibid., 278 [343]。

¹⁰ ただし、「サーモスタットには経験があると言っても、それはサーモスタットの心的生活に多くのものがあると言っているのではない。…われわれはただ、なんの概念も何の思考も持たず、その近傍にいかなる複雑な処理プロセスも持たない、分節化以前の経験の〈閃き〉のような何かを想像すれば、それで足りるのである。」 Ibid., 295-296 [363]。

¹¹ 汎心論としてのベルクソン哲学については Barnard (2011) 参照。

3. チャーマーズは「物理的領域は因果的に閉じている」(Ibid., 161 [207])と述べて相互作用二元論を否定するのだが、その上で「では自由とは一体何なのか」と問うことをしない。つまり、彼には自由論が欠けている。しかし、自由とは単なる理論的な構成物ではなく、実際に経験されるものである以上、「意識にまともに取り組む take consciousness seriously」べきだと繰り返し述べ、意識を物質に還元することはできないと強調している彼が、自由については物理的因果作用に還元できるかのように示唆することには違和感がある。『物質』は記憶の領域に自由を求めており、それは『試論』の時間論に直接繋がっている。ここでは論じる余裕が無いが、先の二点に加えて、改めて『物質』の記憶論・時間論を参照し、「時間と自由をまともに取り組む」ことが求められる¹²。

おわりに

極めて限られた範囲ではあるが、『物質』の今日的状況とその可能性の一端を論じてきた。率直に言って、現代の心身問題論は唯物論の様々な変種(社会生物学的、進化論的、機能主義的等々)の独壇場である様に思われる。チャーマーズの議論は、そこに新たな可能性を開いている一方で、その内蔵するラディカルさを十分に展開しきれていない。彼の自然主義的・二元論を『物質』と接合するという可能性を一層展開し、さらには『物質』を現代の心身問題論のより広い文脈に位置付けてその価値を再評価すること、それが今後の課題である。

¹² 脳神経科学と自由に関しては居永(2013)も参照。

参考文献

・ベルクソン

Bergson, Henri. (2001). *Œuvres*, 6^e ed. PUF.

Matière et Mémoire (MM=『物質と記憶』合田正人・松本力訳、ちくま学芸文庫、2007年。)

・邦語

居永正宏 (2012) 「「生きている私の死」と死後に残るもの：ベルクソンの生の哲学による死の理解」『哲学』、第 63 号、135-154 頁。

——— (2013) 「心脳問題と人間的自由：リベットの実験とデネットの解釈について」『現代生命哲学研究』、第 2 号、23-36 頁。

沖政裕治 (2006) 「ベルクソン哲学と脳科学」『広島大学フランス文学研究』、第 25 号、21-38 頁。

コッホ、クリストフ (2006) 『意識の探求 (上、下)』土谷尚嗣他訳、岩波書店。

杉山直樹 (2005) 「スピリチュアリズムの冒険—ベルクソン研究の現況をめぐって」『創文』、第 472 号、44-47 頁。

シャンジュー、ジャン＝ピエール (1989) 『ニューロン人間』新谷昌宏訳、みすず書房。

——— (1991) 『分子と記憶』山口知子他訳、同文書院。

藤田尚志 (2009) 「ベルクソン研究の現在」『思想』、No.1028、118-139 頁。

山本貴光・吉川浩満 (2004) 『心脳問題』、朝日出版社。

・外国語

Barnard, G. William. (2011). *Living Consciousness*. State University of New York Press.

Čapek, Milič. (1987). “Bergson’s theory of the mind-brain relation.” *Bergson and Modern Thought*. Eds. Andrew C. Papanicolaou & Pete A. Y. Gunter. Harwood Academic Publishers. 129-148.

Chalmers, D. J. (1995). “Facing up to the problem of consciousness.” *Journal of Consciousness Studies*. 2(3). 200-219.

———. (1996). *The Conscious Mind*. Oxford University Press. (『意識する心』林一訳、白楊社、2001年。)

———. (1997). “Moving forward on the problem of consciousness.” *Journal of Consciousness Studies*, 4(1). 3-46.

Delacour, Jean. (1997). “Matière et mémoire, à la lumière des neurosciences contemporaines.” *Bergson et les Neurosciences*. Eds. Philippe Gallois & Gérard Forzy. Institut Synthélabo. 23-27.

Kelly, E. F., et al. (2007). *Irreducible Mind*. Rowman & Littlefield.

- Gallois, Philippe. (1997). "En quoi Bergson peut-il, aujourd'hui, intéresser le neurologue." *Bergson et les Neurosciences*. Eds. Philippe Gallois & Gérard Forzy. Institut Synthélabo. 11-22.
- McGinn, C. (2000). *The Mysterious Flame: Conscious minds in a material world*. Basic Books.
- Matthews, Eric. (1999). "Bergson's concept of a person." *The New Bergson*. Ed. John Mullarkey. Manchester University Press. 118-134.
- Missa, Jean-Noël. (1997). "Critique positive du chapitre II de Matière et mémoire." *Bergson et les Neurosciences*. Eds. Philippe Gallois & Gérard Forzy. Institut Synthélabo. 65-83.
- Mullarkey, John. (1999a). *Bergson and Philosophy*. University of Notre Dame Press.
- . (1999b). "La philosophie nouvelle, or change in philosophy." *The New Bergson*. Ed. John Mullarkey. Manchester University Press. 1-16.
- Papanicolaou, Andrew C. (1987). "Aspects of Henri Bergson's psycho-physical theory." *Bergson and Modern Thought*. Eds. Andrew C. Papanicolaou & Pete A. Y. Gunter. Harwood Academic Publishers. 56-128.
- Pribram, Karl H. (1987). "Bergson and the brain." *Bergson and Modern Thought*. Eds. Andrew C. Papanicolaou & Pete A. Y. Gunter. Harwood Academic Publishers. 149-174.
- Sheldrake, Rupert. (2012). *The Presence of the Past*. Park Street Press.
- Tzavaras, Athanase. (1987). "Bergson and the French neuropsychiatric tradition." *Bergson and Modern Thought*. Eds. Andrew C. Papanicolaou & Pete A. Y. Gunter. Harwood Academic Publishers. 187-200.
- Wolms, Frédéric. (1999). "Matter and memory on mind and body." Trans. Pelagia Goulimari. *The New Bergson*. Ed. John Mullarkey. Manchester University Press. 88-98.